

ねぎ・秋冬どり（品種：夏扇4号）

香取農業事務所

1 地区名

香取郡東庄町新宿

2 栽培戸数、面積、収穫量又は出荷量、出荷先又は販売方法

- (1) 栽培戸数 1戸
- (2) 栽培面積 37a
- (3) 収穫量又は出荷量 出荷量 3,000kg/10a
- (4) 出荷先又は販売方法 市場及び直売

3 ちばエコ基準達成状況

区 分	実施状況	ちばエコ基準
化学合成農薬（成分回数）	5回	18回
化学肥料（窒素分量）	11.8kg/10a	13kg/10a

4 事例のあらまし

- (1) 土づくりは、ほ場が砂地であるため、緑肥作物（えん麦）と町内の養豚農家から供給される豚ふん堆肥を組合せ、地力を高め肥効を持続させます。
- (2) さび病とべと病に強い品種を導入すること、土づくりではほ場の保水性を高め根を健全に育てることで、病害を防ぎ、防除の負担を軽減します。

5 背景・動機

市場等の実需者及び直接販売する消費者より「ちばエコ農産物」が求められています。慣行栽培と同等の収量の確保、及び栽培を継続するため、以下のことを配慮しています。

- (1) 栽培に適した土作りを目指して
有機物の腐熟の促進及び窒素の投入を抑えることで病害虫の発生を抑制することを考えています。
- (2) 農薬・化学肥料に頼りすぎない農業
作物ごとに節減できる技術を組合せ無理のない栽培を目指します。ねぎの他、水稻では合鴨栽培、たまねぎについては化学合成農薬及び化学肥料を使用しない栽培を行っています。

なお、東庄町でねぎを栽培する生産者は10戸ありますが、そのうち「ちばエコ農業」に取り組む生産者は1戸です。



プラソイラーによるすき込み（4月）



黒斑病の発生（10月）

6 栽培方法

(1) 土づくり（4月7日）

ほ場は砂質土であり、緑肥のすき込みや堆肥の施用によって、保水性を確保します。

- ・ えん麦すき込み（秋まき 播種量：10kg/10a）（プラソイラー）
- ・ 豚ふん堆肥（4t：豚ふん80%、もみがら20%）（2トン堆肥散布車）

(2) 播種（4月12日）

水稻育苗ハウスを利用し、専用培土で育苗を行います。

(3) 定植（5月18日）

定植と同時に、カルホス微粒剤F及びアクタラ粒剤5を利用し、ネキリムシ及びアザミウマの防除を行います。

また、定植後の除草作業を軽減するため、ほ場全面に除草剤（ゴーゴーサン乳剤）を散布します。

(4) 施肥（基肥5月26日、追肥9月19日及び10月17日）

有機質配合肥料を用い、認証基準以下になるよう調節します。

(5) 定植後の病虫害防除

発生状況を確認し、適宜防除を行います。

アザミウマ、ハモグリバエ（7月7日、9月19日）

- ・ ジメトエート粒剤や、オンコルマイクロカプセル等の粒剤を活用します。

なお、10月以降はアザミウマの発生が止まり、食害痕は調製作業で切り落とす外側の葉に限られると考え、防除を行いませんでした。

- ・ 栽培計画では定植から9月末まで1作3回防除が必要と考えています。

黒斑病及び、さび病（本作の防除なし）

さび病の発生は見られなかったこと、黒斑病は調製作業で切り落とす部分に発生が限られると考え、防除を行いませんでした。

なお、発生がみられた場合は、アミスター20 フロアブルなどを使用します。

- ・ 栽培計画では9月から 10 月末まで1作3回防除が必要と考えています。

ア 栽培管理

作業名	実施年月日
前作収穫終了※	平成 23 年 3 月 31 日
耕起	4 月 7 日
播種	4 月 12 日
定植	5 月 18 日
収穫開始	平成 24 年 1 月 7 日
収穫終了	4 月 25 日

※緑肥を施用しないほ場もあり、その場所の前作収穫終了日

イ 使用資材

(ア) 土づくり・施肥等

(10a あたり)

使用銘柄(N : P : K)	実施年月日	施用量	全N	化学N
豚ふん堆肥	平成 23 年 4 月 7 日	4 t		
えん麦 (すき込み)	4 月 7 日			
シェルカンネオ (貝化石粉末)	5 月 26 日	200kg		
複合 8-10-8 号(8 : 10 : 8)	5 月 26 日	100kg	8kg	8.0kg
有機アグレットスペシャル(10 : 12 : 8)	9 月 19 日	40kg	4kg	2.2kg
有機アグレットスペシャル(10 : 12 : 8)	10 月 17 日	30kg	3kg	1.6kg
合 計			15kg	11.8kg

(イ) 病害虫・雑草防除等

使用農薬	対象病害虫	実施年月日
ゴーゴーサン乳剤	一年生雑草	平成 23 年 5 月 18 日
カルホス微粒剤 F	ネキリムシ類	5 月 18 日
アクタラ粒剤 5	ネギアザミウマ	5 月 18 日
ジメトエート粒剤	アザミウマ類	7 月 7 日
ジメトエート粒剤	アザミウマ類	9 月 19 日

7 今後の展望等

病害虫防除において、防除回数を少なくすることにより、ねぎの場合、特に葉部の見た目が慣行栽培と比べ見劣りします。この事例では、最終的な出荷の荷姿から逆算し、最小限の病害虫被害に留めるような防除を行っています。防除について省ける部分と必要な部分を更に検討する必要があります。

土づくりと施肥において、ねぎ栽培では生育量を確保するため、根を健全に育て、葉色が落ちないように施肥を行います。この事例では、ほ場が砂地であることから土づくりを重視し、緑肥と豚ふん堆肥により、保水性のある土と緩やかな肥効が現れる土を目指し地力を高めています。ただし、収量がやや少ないため、施肥設計について更に検討する必要があります。

販売において、「おいしさ」を求められる場合、この事例の生産者は、「有機物を施用する」「農薬を少なくする」と味が良くなると考えています。農薬及び肥料等の使用状況は「ちばエコ」で証明した上で、食味についての実証等が期待されます。

東庄町では、砂地でねぎを栽培する生産者は、この事例のみになります。香取管内の利根川沿岸には同じような砂地でのねぎ栽培があります。今後、この事例を参考にちばエコ栽培を普及していきたいと考えます。